

佳作

## 言葉のない手紙

福岡県 福岡県立筑紫丘高等学校二年 宮崎 優希

コミュニケーションをとるということは、とても難しいことである。私は高校生になって尚更それを強く感じるようになっていた。家族以外の人と共にする時間が多くなり、出会いも活動量も増えた。そうすると、自ずと他人と交流する中で何とか合意形成を図り、良好な人間関係を築き上げる必要が生まれる。良好な人間関係を築き上げるとそれを維持する努力が必要である。そのため言葉を選んで、選んで、選びすぎて……。本当にこの世界には息が詰まりそうだ。そう思っていた。しかしそんな私に希望を与えてくれる一人の少女との出会いがこの夏、カンボジアにあった。

私は現地の小学生と交流したり、学校建設を手伝ったりするボランティアでカンボジアを訪れていた。その子に出会ったのはボランティア二日目。袖にレースが施された赤色のTシャツで人懐っこい笑顔の少女。少女はほかのボランティアメンバーと遊んだあと、無邪気に駆け寄ってきた。これが彼女との出会いだった。

と、あの少女が瑞々しい二輪の小さな花を私に差し出していった。思わず笑顔になって、「ありがとう。」

と言うと、私の両耳にその花を引っ掛け、髪飾りのようにしてくれた。そして最後に、私に小さな紙を渡してくれた。先輩ボランティアの方の話を聞くに、彼女はどうかやらず紙のつもりで私にそれをくれたらしい。

満足気な彼女の顔と私の笑顔。あの瞬間を切り抜いて永遠に保管することができるならどんなに美しいだろうと思う。言葉で記録するには及ばない領域であるにちがいない。でもそれは何故だろう。そこにあるのが複数の言語（クメール語、日本語、そして英語）から成る関係だからだろうか。はたまた、そこに言語学の領域を超越した『キズナ』のような何かが生まれているからなのであろうか。確かなことは何も分からないが、それは素晴らしい体験であった。

心を開くことにきつと言語はなくてもよい。カンボジアで出会ったあの少女のように、まっすぐに自らが相手に向き合えば、伝わるものだと思う。この経験をしてから私は、日本にいる時のほうが、コミュニケーションが難しいと思った。関わる人間の年齢層が違うということもあるかも知れないが、言語によって細かいニュアンスの差を生み出してしまうことがあってコミュニケーションを複雑化させてしまっているような気がする。相手

一日目のボランティアで私は、自分の活動に自信を失くしていた。まず、どうやって子どもに話しかければよいか分らなかった。日本でいつもやるように言葉選びから始めようと思った。が、言語なんて伝わらないではないか！何も分からない。しかしただ一つ明らかなのは、一日目に交流した子供たちは確実に私に心を開いていなかった、ということだ。

無邪気に笑いかけ、私の膝の上にちょこんと座る少女。その屈託のない笑顔からこの子は私に心を開いてくれていると確信した。すると、私も自然と笑顔になり、全力で遊びたくてうずうずしてきた。「ボールも大縄もないなら、私がアトラクションになろう」と思い、一生懸命に彼女を笑わせた。義務感ではなくあくまでも自発的に、そうしたいと心が思った。そこで私はハツとした。相手に心を開かせるには、まず自分がオープンな状態でなければ何も始まらないのではないかと。

一日目、私はどこかで子どもを恐れていた。否、子どもを恐れていた、というよりは子どもに嫌われるのを怖がっていた。その恐怖から私は子どもに心を開けないまま、子どもが心を開くのを待ってしまったのだ。

しばらく遊んだあと、その少女はどこかへ風のように走り去ってしまった。遊びに飽きさせてしまったのかと思っ少し落ち込んだ。そのままぼんやり地面を眺めていると、紅紫色のそれが急に視界に飛び込んできた。見

を恐れ、小さいことを気にして考えすぎてはだめだ。これからは、言葉だけに頼りすぎず、表情豊かに気持ちをぶつけていこうと思う。そうすることで、この息苦しさから脱せるかも知れない。

もし、私がまた言葉に縛られて苦しむことがあるのなら、その時はあの手紙を何度でも開いてみようと思う。そうすればハート以外何を意味するか分からない筆跡と、無数のスタンプがいつでも彼女の笑顔を思い出させてくれるはずだから。